

ふるさとを語る

兵庫県は、5つの国から成り立っており、多彩な人材を輩出しています。そこで、毎回、さまざまな分野で活躍中の方に「ふるさとひょうご」を語っていただいています。

今回は、登山家・登山ガイドで(株)フィールド&マウンテン代表取締役社長の山田淳さんに、古川県人会事務局長がお話を伺いました。

山田 淳

やまだ あつし



神戸市（北区）出身

1979年5月8日 神戸市生まれ

主な登山歴 2002年5月、エベレスト登頂により7大陸最高峰登頂の史上最年少記録（当時）を更新。

出身校 灘中学校、灘高等学校、東京大学経済学部

山田さんは神戸市のご出身と伺いましたが、最初にふるさとの思い出についてお聞かせください。

生まれたのは北区の西鈴蘭台ですが、小学校に上がる年、西神ニュータウンに引っ越し、高校を出るまで住んでいました。

小学生までは小児ぜんそくのため、体が弱い子でした。たまたま勉強は好きだったので、自分の得意なことを伸ばそうと思い、小4の時から塾通い。ひたすら勉強したのを覚えています。

また、両親ともに登山が趣味でなかったのですが、小学校卒業時点での登山歴は、車で六甲山に登った程度です。

中学の時、ワンダーフォーゲル入部をきっかけに登山を始められたと伺っていますが、その頃の思い出を教えてください。

中学進学を機に、体の弱い自分を克服するため、運動部への入部を考えてみたものの、人と競うのは苦手なので野球やサッカーという選択はなかったのです。そして「やっぱり文化部かな」と思っていたら、文化部の部室が集まっている建物の隅っこに、ワンダーフォーゲル部を見つけたのが出発点でした。

最初は学校近くの住吉川などでトレッキングを積むだけでしたが、初めての夏合宿で屋久島に行き、山と自然に目覚めました。360度自然に囲まれた屋久島の環境がとても気に入る、もの凄く感動したのは今でも忘れられません。また、部活動でも週末は六甲山系のあちこちに登ってテントを張り、キャンプ生活を満喫していました。

こうなると、家族旅行も自分で登山の計画を立て、「また山登り」と言われながら両親と日本中の山を登りました。高校2年の時、富士山を初登頂したのですが、一緒に登った両親は高山病となり、それ以来、父は私と山登

りをしなくなってしまう、というオチまであります。

やがて進学を真剣に考える時期となり、冒険家の植村直己さんの著書などから受けた影響と、旅行好きである性格も組み合わせ、海外の山にチャレンジするため、両親のもとを離れて進学するを選びました。

学生時代に7大陸最高峰登頂を達成されていますが、チャレンジされた動機や思い出などを教えてください。

日本人なら、一度は日本で最も高い富士山に登ってみたい、という気持ちを持っている方は多いでしょう。それと同じような感覚で、世界7大陸の最高峰をめざそうと思ったのです。

親から見ると登山を始めて、体が強くなって良かった良かった、だったのがエベレストまで登るのか、ということまで心配をかけました。実際、エベレストは事故も多く、7大陸最高峰の中では最も難易度が高いのです。仮に7大陸最高峰の難易度の合計を100点とすると、エベレストのスコアは99・9点以上と思います。

海外の山は入山手続にも時間を要し、例えば南極でしたら渡航手段も限られています。今、振り返ると、エベレストというのは世界中の登山家が一生あこがれ続けて、1回登るチャンスがあるかどうかという山と思うのです。そのような山に、23歳という若さで登れたのはラッキーだったと思います。ただ、その頃は山に登りたいという一心でした。

山を登り続けていた山田さんは、どのような学生時代を過ごされていたのですか。

1年のうち250日は山で過ごして、大学に通ったのは5日だけ、という年もあります。登山ガイドのバイトで稼いだお金を海外遠征に使う、まさに「山で稼いだお金を山に返す」を地で行く日々でした。最後のエベレストだけはスポンサーがつかいましたが。

入部した登山部は当時、在籍4名と廃部一步手前だったこともあり、海外遠征の装備置き場の部室、上京して最初に住んだ兵庫県人寮の尚志館はバイトの拠点、というのが私の中の位置づけでした。あまり戻ってこない

尚志館の住人でしたが、ここでの人間関係は良い意味で濃厚で、楽しい思い出が詰まっています。今でも、当時の尚志館の皆さんとは、とても仲良くお付き合いしており、その意味でも県人寮は大切な施設だと考えています。

大学には7年間在籍しましたが、6年目あたりで登山ガイドの道が続けるかどうか悩みました。エベレスト登頂後、一種の充実感とともに、これからはより多くの人に登山の楽しさを伝えたいという気持ちが強くなりました。そこで考えてみると、登山ガイドを40年間続けたとしても、延べ2万人ぐらいの方にしか登山の楽しさを伝えられないことに気がきました。

その時、今の自分に足りないものは何かと自問自答すると、そもそも社会の仕組みを知らない、そして仕組みやビジネスモデルを作る側に回るために必要なことを知らない、と判断し、これらを短期間で学ぶための修行と決めて、大学を卒業し、外資系のコンサルタント会社に就職しました。

就職後3年半で退職、翌年には今の会社を起業されましたが、何か転機があったのですか。

就職は3年で山の世界に戻る前提での修行と考え、その間は登山から完全に離れていました。実際には3年半ほど働いたのですが、海外勤務を経験し、希望していたマーケティングに従事できたので、山とは別の意味で楽しく働く日々でした。修行のために就職したことは、すっかり忘れていたのです。

しかし、2009年7月に北海道のトムラウシで10名の方が亡くなる遭難事故を知った時、自分が本当にやりたいことを思い出し、翌日、退職届を出しました。

この事故を調べたり、観光白書を読み返すと、登山業界は人命を預かっているのに商業ベースだけで走っているか、あるいは自然重視の牧歌的な考え方だけを持っている、そこには顧客の方を向いていない現実があると思いました。そこで私は、登山業界でお客さんの方を向いた仕事をする、と決めました。

当時は山ガールブームの前夜でしたが、登山をしたい

けど山に登っていない、という理由を分析すると、情報や登山ガイドの存在ではなく、安く手軽に始められない点だと判りました。登山用具は少量生産品が多いので、初心者用でも一式を購入すると10万円ほど必要なのです。装備を安くレンタルするだけでは、山に登る人が増えないので、登山の情報を盛り込んだ無料のフリーペーパーを作成し、併せて登山のきっかけとなるイベントも行う、という機能を持たせた会社を立ち上げ、今に至っています。

会社のミッションは「安全な登山の推進」と「登山人口の増加」ですが、「安全な登山の推進」に必要なものは何ですか。

一番直接的な効果があるのは装備です。初心者に向かって経験や体力だと言いつつ、登山に対するハードルを上げるだけで、禅問答みたいな話になってしまいます。

だから、安くレンタルで装備を提供しているのです。現在、富士山には年間30万人が登っていますが、そのうちの4万人が当社のレンタル品を利用されています。この方々が寒くなく、濡れずに登山できるようになったことは、私のやりたいことができつつあるのかな、と思っています。

もう一つのミッション「登山人口の増加」の具体的な目標を教えてください。

とても大きな目標ですが、日本人の7割が登山をする、というのが目標です。ただ、日本人の7割が富士山やエベレストをめざす登山家になってもらう、という意味ではありません。

私は登山を3種類に分けています。自分の限界をめざすアスリートとしての登山、人を連れていくというガイドとしての登山、ただ楽しいから登るレジャー登山の3つです。

日本は少子高齢化の影響により、労働力人口の減少が不可避です。これまでは製造業に軸足を置いていましたが、今まで十分に活用できていなかった資源も含めて、

総力体制で立ち向かわないと、GDP世界第3位がもたらず生活水準を維持できないと思っています。この「活用できていない資源」とは、国土の7割を占める山だと私は確信しています。

山を活用するためには、まず、日本人自身が日本の山の良さに気付く必要があります。そして、気付いた山の良さを世界に向けて発信し、外国から来た観光客にも日本の山に登ってもらおう、というものです。現在、日本の観光業のGDPに対する寄与率は3%程度ですが、ヨーロッパ諸国では10パーセント程度である国も多いのです。日本国内にある4つの世界自然遺産のうち、3つは山が評価されて指定されていることも考え合わせると、もっと日本の山の良さを世界に知ってもらい、観光客を増やすことで経済が活性化するという流れになればいいなと思っています。

ですから、国民の7割が紅葉狩りやハイキングも含め、登山をしている社会というのが目標です。

最後に、兵庫県人会の方やふるさと兵庫に対するメッセージをお願いします。

地元でいた頃、数えきれないぐらい六甲山の縦走をしました。聞くところによると、六甲山縦走大会の参加希望者が増えて、抽選制とのことですが、そのこと自体がもの凄い価値を持っていると思います。神戸は人口100万人を超える港町なのに、六甲山という山も同時にあります。山を歩きながら海と街が眺められる、このような場所は世界中でも希少です。

そして兵庫県はかの有名な植村直己さんをはじめ、多くの登山家を輩出し、身近な場所にフラッと登ることのできる山があります。

帰省された時などに皆さんで近くの山を登って、その良さを多くの人に伝えてください。そして、神戸港などに寄港するクルーズ船のお客さんが、列をなして六甲山に登っている光景が広がったら、私のミッションが少し達成できた日になると思います。